

# 若林 颯

Akira Wakabayashi

# 魔弾

のピアニスト

vol.1 頂きに向かって...

program

メトネル

忘れられたメロディー 第1集 Op.38~ 回想ソナタ Op.38-1

Nikolai Medtner : Forgotten Melodies Book 1 Op.38; Sonata-Reminiscenza Op.38, No.1

ラフマニノフ

ピアノ・ソナタ第1番 二短調 Op.28

Sergei Rachmaninov : Piano Sonata No.1 in d-minor, Op.28

ドビュッシー

映像 第2集

Claude Debussy : Images, Book 2

ショパン

バラード第4番 へ短調 Op.52

Ferederic Chopin : Ballade No.4 in f-minor, Op.52

ストラヴィンスキー

ペトルーシュカからの3楽章

Igor Stravinsky : 3 Movements from Petrushka

2023年5月20日(土)

14:00開演(13:30開場)

東京芸術劇場コンサートホール

全席指定 S席5,000円 / A席4,000円 / B席3,000円

プレイガイド

アスペン 03-5467-0081

チケットぴあ <https://t.pia.jp> (Pコード 233-076)

イープラス <https://eplus.jp/wakabayashi2023/>

東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296 (休館日を除く 10:00-19:00) <https://www.geigeki.jp/t/>

※チケット料金には消費税が含まれております。※止むを得ず、公演の内容に一部変更になる場合がございます。※未就学児のご入場はご遠慮ください。

主催・マネジメント：株式会社アスペン 03-5467-0081

特別協力：株式会社ヤマハミュージックジャパン / アーティストサービス東京

後援：一般社団法人全日本ピアノ指導者協会 (ピティナ)

特別協賛：株式会社パワーズアンリミテッド

photo by Tetsuya Hoshino + design by Takeshi Mori

# 若林 顕

## 魔弾のピアニスト

“百発百中”ではもはや筆舌に尽くし難い / 轟く打鍵が果てしなく撃ち抜いてきただろう / 眉間を、そして魂の琴線を ……

映画監督：星野哲也

人々は「感動」を心を熱くさせるとよく表現するが、若林顕の演奏は腹の底を熱くさせる。地球の中心にあるマグマがとてつもない圧力によって高温になるように、その演奏のもつ圧力が身体を中心を燃やすのだ。それは圧倒的に豊かな音量や鮮やかな超絶技巧のせいだけではない。作品の内側に入り込んだ、作曲家の心の裏に触れるような繊細な表現でも同様だ。ベートーヴェンのソナタとショパンのピアノ作品の、全曲シリーズの成功を足掛かりにして、若林はさらなる高みへと歩を進めている。今回の3回シリーズでは、作曲家たちの代表作とも言える名品が並んだ。傑作の真の姿が「魔弾」となって、聴き手の身体の内奥深くに打ち込まれることだろう。

音楽ジャーナリスト：堀江昭朗

### 若林 顕 (ピアノ) Akira Wakabayashi - Piano

20歳で第37回ブゾーニ国際ピアノ・コンクール第2位、22歳でエリザベート王妃国際コンクール第2位の快挙を果たし、一躍脚光を浴びた。その後国内外の多数のオーケストラとの共演や国内外でのソロ・リサイタル等、多忙な演奏活動を展開し、現在に至るまで常に第一線で活躍し続けている。東京藝術大学で田村宏氏に、ザルツブルグ・モーツァルテウム音楽院、ベルリン芸術大学でハンス・ライグラフ氏に学ぶ。第3回出光音楽賞、第10回モービル音楽賞奨励賞、第6回ホテルオークラ賞受賞。

2022年にニューヨーク・カーネギーホール（ワイル・リサイタル・ホール）で鮮烈なリサイタル・デビューを果たし、カナダ・トロントの「ミュージック・トロント・チェンバー・ミュージック・シリーズ」やシカゴの「マイラ・ヘス＝リサイタル・シリーズ」で大成功を収めて再招聘されるほか、フランス・ナントでの音楽祭「ラ・フォル・ジュルネ」、ストックホルムの「アモリナ・リサイタルシリーズ」などにも出演。また、英国マンチェスターの「ノーザン・カレッジ・オブ・ミュージック」でのマスタークラス、フランス・ティヌの「ミュージック・アルプ」Music Alp等、活動領域を着実に拡大している。共演したオーケストラは、NHK交響楽団をはじめとする国内の主要なオーケストラのほか、ベルリン交響楽団、サンクトペテルブルク交響楽団、ロシア・ナショナル管弦楽団、エーテボリ交響楽団、ノールショピング交響楽団、リンブルク交響楽団、パドゥルー管弦楽団、スコットランド室内管弦楽団といった海外の名門オーケストラも多数。

ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー、ゲルト・アルブレヒト、アレクサンドル・ラザレフ、ダニエル・ハーディング、オスモ・ヴァンスカ、ウラディーミル・スピヴァコフ、ゲルハルト・ボッセ、ヘルムート・ヘンヒェンといった名指揮者とも数多く共演している。

室内楽の分野では、カルミナ弦楽四重奏団、ライプツィヒ弦楽四重奏団、ウィーン八重奏団、コリア・ブラッハー、ステイブズン・イッサーリス、カール・ライスター、フランソワ・ルルー、ラデク・バボラクなど、内外の名手達と数多く共演し、好評を博している。また、近年はヴァイオリニスト鈴木理恵子とのデュオで、作品の本質に迫る深い音楽性が各地で高い評価を受けている。レコーディングではこれまでに多数のソロ・アルバムをリリース。2013年以降続々とリリースされた、「ラフマニノフ：ピアノ・ソナタ第2番、前奏曲」、「ベートーヴェン：3大ピアノ・ソナタ」、「チャイコフスキー：くるみ割り人形（ピアノ独奏版・世界初録音）」、「リスト：ピアノ作品集」、「チャイコフスキー：ピアノ協奏曲第1番（ラザレフ指揮日本フィルとのライブ）」、「ショパン：エチュード全集」、は全てレコード芸術・特選盤となり、極めて高い評価を受け続けている。

2018年リリースの「ショパン：エチュード全集」では、レコード芸術で「これは超弩級の形容がふさわしい、稀に聴くほどの名演譜である… 詩人ショパンの微笑が、難技巧を超えて輝く名演… これを待っていた。」（濱田滋郎氏推薦）、「1音の存在感、鉄壁の技術と洗練された音楽性… 唯一無二の音楽が響いている。知情意の均衡のとれた名演である。」（那須田務氏推薦）と評された。また、2014年以降リリースされた鈴木理恵子とのデュオによるCDも「シューベルト：ヴァイオリン・ソナタ集 Vol.1」、「レスピーギ&フランク：ヴァイオリン・ソナタ」（いずれもレコード芸術特選盤）、「モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ集 Vol.2, Vol.3」（いずれもレコード芸術特選盤）と常に高い評価を受けている。リサイタルにおいては2014年と2016年にサントリーホール（大ホール）でソロ・リサイタルを行い、「類のない高次元の名演」「圧巻のリサイタル」と評され大成功をおさめた。2020年11月には4年ぶりにソロ・リサイタルを東京芸術劇場コンサートホールで行い、「ポリーニのショパン・エチュードのCD帯にあった『これ以上何がお望みですか』ではないが若林の技巧も然り。感服した。」（「音楽の友」上田弘子氏）、「こういうピアニストが居たんだ、日本にも。胸に沁んでゆくその想いは、アンコールの最後まで尽きることなく湧き上がった。日本にも、という言い方は正しくない。思い浮かべ得たのはA・シフくらいだろうか。」（「Mercure des Arts」丘山万里子氏）と評された。また、自身では3回目となる「ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全曲シリーズ」を2017年に完結し、2018年より2022年まで行った「ショパン：ピアノ作品全曲シリーズ」はピアノ協奏曲の五重奏版やチェロとの作品まで含む全15回にも及び高い評価と支持を得た。

「エチュード Op.10 全12曲」を含むリサイタルでは、「完璧なエチュード ヴォルトウオーゾ・ピアニストの本領発揮」と大絶賛された。

ガキの頃からロックンロールを聞き漁ってきた野蛮な耳にはクラシックは綺麗すぎるというも思っていた。しかし、初めて若林顕さんの音を聴いた時、その音の魂にぶつ飛んだ！音のブロックが次から次へと降ってくる感じ。これは当たったら痛いヤツだ。これはロックの音だ。彼は完全に僕のクラシック感を捻じ伏せた。夢中で音に聴き入った。時に暴力的に、時に愛撫するように、指先一つで音質、音量をコントロールする一人芸術に度肝を抜かされた。そもそもクラシックは楽譜があり、型を学び、それを頒布するものだと思っていた。ごめんなさい。全くの理解不足だった。クラシックとは型を学び、型を壊すものなのかもしれない。気になって他の人が弾く同じ曲を聴き比べてみたが、全然違う。同じ譜面でこうも違うものなのか。彼らは今まで聴いてきたピアノの音だ。若林顕の音はこれはピアノなのだろうか？魂を突きつけられているような、胸ぐらを掴まれ、「お前は本物なのか!？」と詰問されているような、そんな気にさえなる。まるで打楽器、グローブで連打されているような錯覚を覚える。時にリトル・リチャードのようにシャウトで叩きのめし、時にエルビスのようにエロティックに囁き、時にサム・クックのように優しく癒してくれる。変幻自在の一人楽団。まさに魔弾のピアニスト。今、彼の音を聴くのが楽しみで仕方ない。僕らは知っている。若林顕は本物だ。

TVプロデューサー：平野雄大 (FACTORY)